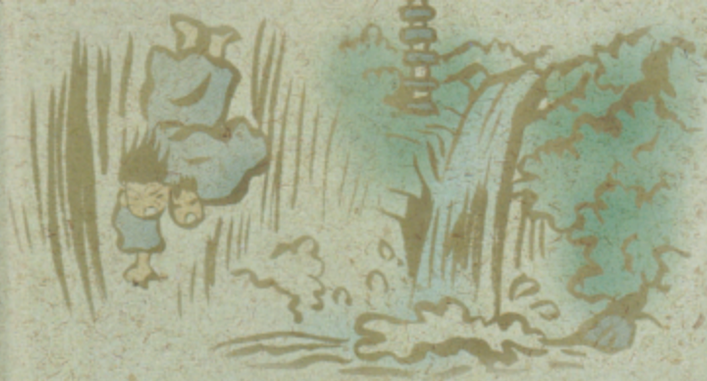
吾平の民話

明和の落石と稚子の滝



吾平山上陵は人里離れた山中なので昔から御陵守の一家が神任えとして常に奉仕申していた。

時は明和四年（一七六七）山伏の養仙院という一修験者が、この地に来て己が御陵守となろうて企て、陵の岩屋の前に仏壇を構え御守礼など並べて参拝の人々に頒ったので、当時御陵守だった一郎右衛門はその頃わずか十一歳であったが、けなげにも御陵の守護は代々わが家に仕え奉る旨を語り固く断わった。しかし山伏は何と言われても相手にせず、いろいろといいすかして、一郎右衛門を妨げた。ところがその年の十二月二十六日御陵窟口上の巨岩縦二丈余、横八、九間ばかりが忽ち大音響と共に崩れ落ち、窟内見えぬばかりにふさがった。この奇異のことは全く御神威によるものと村人から責めたてられた養仙院も恐れをなし遂に何処ともなく退散した。そこでもとのように一郎右衛門が御陵守として仕え申したという。この窟口上の落岩を「明和の落岩」と称している。

御陵に面して立てば耳をかすかに振わせる滝がある。これは稚子の滝であるがこの滝について次のような伝説がある。「三国名勝図会」によると瀑布の上に五輪の石塔があった。高さ四尺「兒の石」といった。これは昔この辺に天台寺の六ヶ寺があり、何か深いわけがあってその寺の稚子がこの滝つぼに身を投げて空しく果てた供養の石塔だといい伝えられている。このためちご滝というようになった。またこの石塔の向かいの岸壁の中ほどを小さくうがった所があって、そこを「兒の窓」といったそうである。しかし俗説には昔この里に大層意地悪い継母がいて毎日のように、まま子いじめを続けていたが、ある日その子を滝つぼに捨てようと企て、この許りは平生と異なり丁寧に滝つぼの上につれ出しばらく腰を休めながら機会を窺っていた。昔から「三つ子の魂百まで」などといわれているが、髪をなで、しらみを取ってくれたり、子守唄まで歌い、いたわる継母の態度を子供心にも不審に思い、もしもの時の用心にそっと己の帯を母の帯に結びつけておいた。しばらくして継母は急に立ち上がりいきなり継子を滝つぼに突き落とそうとして自分もろとも落ち込んだと伝えられている。思うに村人は昔から因果応報を風刺した物語として言いつがれたものであろう。このなぞを秘めた滝つぼは、昭和十三年十月十五日の風水害にその底を浅くしたとはいえ渓谷の清い流れは、今なお親善懲悪の光をたたえている。

権現島の鬼火

下名川東の田圃の中に円い形をした権現島と呼ぶ小山がある。この一帯は肝付氏と島津氏の軍勢が争った古戦場で肝付勢は戦略をもって牟田の中に大木を浮かべ、島津勢を迎えた。田の中に乗り入れた島津勢は浮いた大木に悩まされて苦戦に苦戦、もちろん肝付方にも多くのぎせいが出て、その遺骸と鎧かぶとがこの権現島に埋められた。ところが夏になると巨大な鬼火が肝付城（肝付町本城）へ向けて飛び立つというのである。「そんな馬鹿な話が」というが付近の人々は「いや確かに出ます」といって聞かない。明治の中頃ある親子がこの鎧かぶとを掘ろうとしたところ親子とも死んだとのこと。これは権現島の霊のたたりであったろうと人々は語っている。

飴屋敷

海神の娘であられる豊玉毘売命は、夫の日子穂穂手見命（火遠理命・山幸彦）のおられる葦原中国に出向いてこられて、「私は今、身ごもっていて、出産の時になりました。あなたの御子は海原で生むべきものではないと考え、こうして出向いて参りました」と夫へ申された。そして直ちにその海辺の波打際に、鵜の羽を屋根を葺く材料にして、産屋をつくられた。ところがその産屋の屋根をまだ葺きおわらないうちに、豊玉毘売命のおなかの子の生まれる時がせまるのにたえられなくなられたので、毘売命は産屋におはいりになった。そしてまさに子供を生もうとなされるときに、夫に「異郷の者は出産しようとする時は、本国の者の姿になって子を生むものです。それで、私も今、本来の姿になって出産しようと思っています。そこで私の姿をごらんにならないで下さい」と申された。しかるに夫の命は、毘売命のいわれたことを不思議に思われ毘売命が出産される様子をそっとのぞき見なさると、八尋もある大わにに姿をかえて、はいのたうちまわっておられた。夫の命は、この有様を見るや、おどろき、おそれをなして逃げられた。そこで、豊玉毘売命は、夫ののぞき見なされたことをお知りになられ、恥ずかしいことだと考えられ、その御子を生み、その場に御子を残して、「私はずっと海中の道を通ってこの国と往き来しようと思っておりました。それなのに私の出産の時の姿をのぞき見なされたのは、まことに心外であります」と申され、直ちに葦原中国と海神の国との境をふさいで、海神の国に帰っていってしまわれた。このようないきさつで、豊玉毘売命がお生みになった御子を命名して、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命というのである。神名は、なぎさにある産屋の屋根を鵜の羽で葺く際に葺き終わらないうちにお生まれになった勇ましい神の義にあるといわれている。

妃をお失いなされた命は、乳飲子をどんなにして育てようか悲嘆にくれておられた。そのとき一人の老婆があらわれ、母乳の代わりに飴をねって差し上げ、御子はその飴のおかげでご成育なされたそうである。

上名にある飴屋敷跡は御子へ飴を差し上げた人の宅地跡と伝えられている。